

## 東西冷戦時代と戦後ドイツ文学への影響

足立 邦夫

倉敷芸術科学大学産業科学技術学部

(2005年9月30日 受理)

### はじめに

第2次世界大戦が1945年に終結したあと、世界は冷戦時代を迎えた。冷戦は世界を東西に分断し、西側陣営を率いる米国は「封じ込め政策」の下にソ連を盟主とする東側陣営と対立、ソ連は反撃の政策で西側陣営に揺さぶりをかけた。2つの陣営への分裂は世界の政治・軍事・経済分野を中心に大きな影響を与えた。

政治での東西対立が最も鮮明に現れた最初のものが、1948年6月に起きたソ連によるベルリン封鎖だった。ソ連は西ドイツ地区での通貨改革に対抗して東ドイツ地区でも通貨改革を実施したが、自由往来が保証されていた米ソ英仏4カ国管理下のベルリンに2種類の通貨が流通することでソ連管理下の東ドイツ地区に混乱が起きることを懸念、西ドイツ地区とベルリンとを結ぶ陸路・空路・水路の封鎖に踏み切った。事件は第3次世界大戦に発展するのではないかという衝撃を世界に与えた。

軍事面では西側が49年4月、北大西洋条約機構（NATO）、東側が55年5月、ワルシャワ条約機構をそれぞれ立ち上げ、内には集団的自衛権の下に軍事的結束を図る一方、外には対決姿勢を打ち出した。この構図の中で米ソは核兵器を中心とする軍拡競争に向けて走った。軍縮は行われたが、完全削減には至らず、核爆弾の数は人類を幾度も滅亡させる「オーバーキル」(overkill)の状態にまで積み上げられた。

経済については、「経済的發展こそ東に対する強力な防壁」とみる米国による47年6月のマーシャルプラン（欧州経済復興援助計画）発表によって東側への対抗政策が打ち出されていく。これに対してソ連は49年1月、コメコン（経済相互援助会議）を創設、ソ連・東欧諸国を中心とする社会主義圏内での分業体制によって相互の経済發展を図り、西側に対する経済的優位を確保しようとする。米ソは自陣営内を固めたあと、陣営の拡大を目指して対アジア・アフリカなど第3世界への経済援助でも競い合う。

冷戦の波は文化<sup>1)</sup>の分野にも及んだ。米国は国内に共産主義的思想が広がるのを警戒、50年2月から赤狩り（マッカーシズム）キャンペーンで共産主義的思想に染まっていると疑いのある国民を排除していったが、映像を通して一般国民の意識に大きな影響を与えるハリウッドの映画産業にもその嵐は向かい、多くの監督や俳優たちがハリウッドを去ることを余儀なくされていった。

本論文ではこの文化の問題について、特に西ドイツで冷戦を背景に文学作品が出版社の

「自主検閲」によってどのような影響を受けたかについてドイツの作家エーリヒ・マリア・レマルク (Erich Maria Remarque) の作品について考察したい。

## I

レマルクが1929年に出版した小説 *Im Westen nichts Neues* (『西部戦線異状なし』) は台頭してきた、アドルフ・ヒトラー (Adolf Hitler) が率いる右翼政党・ナチ党によって「世界大戦に参加の兵士たちに向けられた文学作品の裏切り<sup>2)</sup>」の一書とみなされ、非難・攻撃の的となった。身の危険を感じたレマルクはヒトラーが政権を握る直前の33年1月29日、スイスに逃れ、さらに第2次大戦勃発直前の39年8月29日、欧州を離れ、米国に亡命した。<sup>3)</sup>

レマルクが欧州に帰るのは8年9カ月後の48年5月19日のことである。レマルクはこのあと、住居のあったスイスのポルト・ロンコに腰を落ち着けながらニューヨークにも居を構え、パリやローマなども訪れつつ、50年代末までに長編小説としては3編を執筆、出版した。

これらの作品は *Der Funke Leben* (『生命の火花』) (52年7月刊<sup>4)</sup>)、*Zeit to leben und Zeit to sterben* (『生きる時と死する時』) (54年9月刊<sup>5)</sup>)、*Der schwarze Obelisk. Geschichte einer verspäteten Jugend* (『黒いオベリスク ある遅い青春の物語』) (56年10月刊) の3作品である。

*Der Funke Leben* はナチスによって処刑された妹エルフリーデ・ショルツ (Elfriede Scholz) の死に捧げるために書かれたもので、ドイツ敗戦を目前にしたメレルン強制収容所 (ワイマル近郊にあったブーヘンヴァルト強制収容所がモデル) における囚人509号と収容所を管理するナチス親衛隊との闘争、そして主人公の死を描いている。一方 *Der schwarze Obelisk* はドイツの地方都市ヴェルデンブリュック (レマルク生誕の街オスナブリュックがモデル) の墓石商会を舞台に第1次大戦後のインフレと政治変動にもまれながら生きる若者たちの姿を通してレマルクの過去への苦いノスタルジアを描いた自伝的小説である。2作品ともその内容と戦後西ドイツを色濃く覆った冷戦の影との関係で大きな論議を呼ぶことはなかった。<sup>6)</sup>

問題となったのは *Zeit to leben und Zeit to sterben* である。

物語はドイツ国防軍 (Wehrmacht) の若き兵士エルンスト・グレーバーを主人公にし、ソ連軍と死闘を繰り返しているドイツ軍のソ連領内陣地から始まっている。ドイツ軍はソ連軍の反攻を受けながら後退を強いられており、戦場には敗色の空気が漂っている。このような中でグレーバーは賜暇を得て、故郷の街ヴェルデン (オスナブリュックがモデル) に帰る。故郷は連合軍の爆撃を受け、明かりも消えた廃墟と化しており、両親の住んでいた建物も瓦礫の中に姿を消し、両親も亡くなったのか、どこかに避難したのかも定かではない。2人の姿を探し求めているときに父親が強制収容所に送られ、軍需工場で勤労奉仕する、昔面識のあった女性エリザベート・クルーゼと知り合い、軽蔑してきた小市民の幸

福をなつかしみながら平和の一刻を過ごす。やがて賜暇は終わり、再び東部戦線に復帰する。迫り来るソ連軍を前に捕えられたロシア人を銃殺しようとする親衛隊員をグレーバーは射殺し、ロシア人たちに逃げるように促すが、逃げるメンバーの1人が銃口を向け、撃たれたグレーバーは地面に倒れ、死んでいく。

作品は *Im Westen nichts Neues* と同じように戦場と故郷を舞台にしたものであり、主人公も *Im Westen nichts Neues* と同じように戦場に倒れていく。

しかし、*Im Westen nichts Neues* にみられた一種の無邪気な要素はなく、基調は絶望的で暗いものとなっている。

## II

レマルクは *Zeit to leben und Zeit to sterben* の執筆を戦争がまだ終わっていない45年1月からニューヨークで始めている。ベストセラーとなる *Arc de Triomphe* (『凱旋門』) の仕上げが終盤に入ったころのことである。翌46年6月11日、ドイツからもたらされた手紙で妹エルフリーデが43年12月16日、ベルリンのプレッツェンゼー処刑場でナチスによって処刑されたことを知る。このため、*Der Funke Leben* の構想を急遽まとめ、7月から執筆を開始、それが脱稿したあとの51年12月以降、*Zeit to leben und Zeit to sterben* に集中、脱稿したのは54年に入ることである。

秘書によってタイプされ原稿はポルト・ロンコから同年3月中に *Der Funke Leben* を出版したケルンの出版社キーペンホイアー・ウント・ヴィツシュ (Kiepenheuer & Witsch、以下 [KiWi社] と略称する) に送られ、一方米国の翻訳家デンバー・リンドリ・ジュニア (Denver Lindley jr.) もレマルクから順次送られてくる原稿を基に翻訳作業を進めており、米独同時出版の予定だった。

しかし、英語版が出版されたのが54年4月だったのに対してドイツ語版は半年遅れの9月に店頭に並んだ。

反響は以外な形でドイツの外から寄せられた。デンマークの夕刊紙『インフォメーション』(*Information*) 1954年10月9日付が「“インフォメーション”は暴露する：レマルクはドイツで検閲の下に置かれる」という見出しで大きく報じた。レマルクのオリジナル原稿から翻訳されたデンマーク語版とドイツ語版とを比較すると、ドイツ語版の方に内容の削除と改変がみられるというものだった。<sup>7)</sup> このあと、ノルウェー語版や英語版もドイツ語版との間に内容上の相違のあるとの指摘が伝わり始めた。比較すると、ドイツ語版には、小説全体にあった政治色が薄まり、穏やかな調子になっていることが確認された。

海外からの反響を受けてドイツのメディアも問題を取り上げ、週刊誌『デア・シュピーゲル』(*Der Spiegel*) 54年12月15日号は「赤鉛筆による清算」(Liquidation mit dem Rotstift) のタイトルの下に英語版と比較して、どこが削除され、どう改変されたかを報じた。

これより前の54年10月16日、ドイツの通信社dpaはケルン発で騒ぎに対するKiWi社の見

解を次のように報じた。「レマルクはドイツ語の原稿に付して技術的上の細部（状況や専門用語の問題、また小説の外装に関連する他の多くの事柄）が時代と適確にかみ合い、正確に再現されているかどうかを注意深く調べて欲しいと求めてきた。原稿は社内で細心の注意を払って十分に検討され、そして、われわれが提案した訂正を付して著者に送り返された。当然のことながら、変更を受け入れるか、あるいは拒否するかはひとえに著者にゆだねられていた。これを受けてレマルク氏は変更と紙数節約の一部を受け入れる一方、他は拒否した。レマルクによって手が増えられ、印刷用に当社に返送されてきた原稿にはさらなる変更は一切加えられず、レマルクの正当な最後の原稿の姿で本として出版された。当社はエーリヒ・マリア・レマルクのような作家に決して検閲を行うことはないし、エーリヒ・マリア・レマルクも自らの立場で検閲を甘受することはないだろう<sup>8)</sup>」

冷戦の渦中で激しい敵対・ライバル意識を燃やしていた東ドイツはレマルク問題をアテナウアー政権下の西ドイツ反動姿勢の表れととらえて「ここにエーリヒ・マリア・レマルクの歴史と彼の重い罪—なぜなら彼の小説原稿のテキスト原本が改竄されたことをわれわれが確認したことを認めているからだ—が始まる。それとも腰の定まらない出版者が書簡で行っている主張もありきたりの賈金づくりたちのほら話程度なのか？ もしそうであるならば、エーリヒ・マリア・レマルクはこの件で極めて気まずい思いをしながらこれまで守り続けてき沈黙を当然ながら破るべきだ。さらなる沈黙は自らの罪を認めることになる<sup>9)</sup>」と攻勢に出た。

### III

レマルクが70年9月25日に没したあと、その遺された書簡や日記などから問題の真相が明らかになってきた。

KiWi社の社主ヨーゼフ・ガスパー・ヴィツシュ (Joseph Gaspar Witsch) はレマルクから原稿を受け取ったあと、レマルクに原稿の「削除・改変」を求めた。ヴィツシュは長い書簡の中で「極めて率直に申し上げますと、小説の相当部分は不適當であると感じたり、あなたの新著は *Der Funke Leben* と同じように少なくとも厳しいという意見をもつ者が社内には何人かいます<sup>10)</sup>」としてレマルクの描いている兵士たちの行動などに事実と齟齬のあることを元兵士たちから追及されかねない懸念を伝え、併せて削除・改変を行った原稿見本を送っている。

ヴィツシュが小説中で特に問題とした兵士はナチス親衛隊員シュタインプレンナーの描き方で、ユダヤ人の血が4分の1混じった兵士ヒルシュラント(ドイツ語版ではヴィツシュの要請でヒルシュマンに改名)について戦死したと母親に虚偽の報告を送ったり、捕えられたロシア人たちを命令書もなく射殺しようとしてグレーバーによって撃ち殺される。

ヴィツシュは①ドイツ国防軍での自分の経験を照らしてもシュタインプレンナーのような兵士には1度も出会ったことはなく、小説の強い反軍国主義、反ナチズムには疑問②国

防軍では上官といえども兵士個々人の人種を知ることはできず、シュタインブレンナーのヒルシュラントへの対応は不可能—と指摘、ヒルシュラントとユダヤ人との関係部分とシュタインブレンナーが軍隊内で密告者のように描かれている部分の削除を求めた。

これに関連して①グレーバーが自分と戦友たちも結局はシュタインブレンナーと変わらない「殺人者」と示唆している部分の変更②グレーバーによるシュタインブレンナーの射殺に「正当防衛」の意味合いを付与③小説の最終部分でグレーバーが釈放した民間ロシア人によって逆に射殺される場面では「やはりパルチザンなのだ、とグレーバーは考えた」という一文を挿入、当のロシア人たちが戦争と無関係ではなかったことを示唆するニュアンスの付与—を求めた。

さらにヴィツシュは兵士の1人インメルマンが共産党員であったことに触れ、「共産党員たちの政策はナチスのテロリズムのまったくの焼き直しであります、ドイツにおいて共産党員に関して等しく知られておりますことによれば、どのような共産党員であれ、共産党員から何かある種の忠告を受けたり、共産党員をあたかも人間性の擁護者として受け入れる人はほとんどいないのが現状であります<sup>11)</sup>」とし、前共産党員を「前ドイツ社会民主党 (SPD=Sozialdemokratische Partei Deutschlands<sup>12)</sup>) 党員」とすることを求めた。

レマルクからは明確な拒絶反応がないため、KiWi社の希望するような削除・改変がなされてドイツでは出版された。

一方、英語版ではレマルクから送られてきたドイツ語原稿がそのまま英語に翻訳され、デンマーク語版についてはKiWi社から渡されたドイツ語のオリジナル原稿が翻訳されて出版された。ヴィツシュの見解は「ドイツで出版のものは専門用語の正確な用語への変更が必要だが、外国ではそこまでは必要としない」というものだった。<sup>13)</sup> 他の北欧諸国でもデンマークと同じ措置で翻訳・出版された。この結果、レマルクの *Zeit to leben und Zeit to sterben* は世界の書籍市場に内容で相違する2種類のものが出回るようになった。

問題は共産圏諸国での出版だが、東ドイツでの出版権を得た東ベルリンの出版社アオブバオ (Aufbau) は英語版の米翻訳家デンバー・リンドリ・ジュニアに手紙を送り、「出版社キーペンホイアー・ウント・ヴィツシュがわれわれに元の原稿をもはや提供できないため、貴殿が翻訳した原稿をお貸しいただく形でお送り願えないか<sup>14)</sup>」と要請している。手紙の内容はKiWi社にも伝わり、同社は西ドイツ国内で出版されたものと同じ内容での出版を求め、削除・改変原稿で1957年に出版され、それに基づいてソ連・東欧諸国でも同じ内容で翻訳出版された。

#### IV

レマルクの *Zeit to leben und Zeit to sterben* の出版前後の冷戦下における西ドイツ国内の状況と同国を取り巻く環境は概観次のようなものだった。

ドイツは45年5月8日、連合軍に無条件降伏したあと、米ソ英仏の占領を経て、ベルリ

ン封鎖解除後の49年9月、ドイツ連邦共和国（西ドイツ）、同10月、ドイツ民主共和国（東ドイツ）が発足、分裂国家として新たな歴史を歩み始めた。

冷戦時代、西ドイツの保守系政党であるキリスト教民主・社会同盟(CDU/CSU=Christlich Demokratische Union/Christlich-Soziale Union in Bayern e.V.)によって擁立された首相コンラート・アデナウアーは「西側を通過して東側に向かう」という外交政策を掲げた。ベルリン封鎖にみられたソ連の強行政策に対応し、また東ドイツの西ドイツを意識した攻勢に立ち向かうには、西側との強固な連帯こそが不可欠という政策である。

当時の西ドイツの一般的な国民感情はナチス時代を振り返り、ナチスに加担した者の責任を追及したり、また自ら反省をすることよりも、新たな東西緊張状態の中で、「望むらくは赤<sup>ロート</sup>より死<sup>トート</sup>を」(lieber tot als rot)という風潮の下に共産主義を否定し、東側と対峙するという方向に強く舵をとっていった。

共産主義の否定は連邦憲法裁判所による56年8月のドイツ共産党(KPD=Kommunistische Partei Deutschlands)に対する違憲政党判決にも表れている。判決の根拠となったのは基本法(憲法)第21条2項の「その目的または党員の行為が自由で民主的な基本秩序を侵害もしくは除去し、またドイツ連邦共和国の存立を危うくすることを意図する政党は違憲である。違憲の問題については、連邦憲法裁判所がこれを決定する」によるものだった。<sup>15)</sup>連邦憲法裁判所は52年10月には右翼政党の解散を命じる判決も出しているが、共産党の違憲政党判断には冷戦が直接・間接に影響を与えたことは否定できない。

東側との対峙では54年10月、西ドイツは米国など西側諸国とのパリ条約に調印、翌55年5月、条約発効によって占領終了、主権を回復、NATOに加盟、再軍備に乗り出した。当時の西ドイツでは、再び戦争に巻き込まれるのではないかという不安から「私はごめんだ」(ohne mich)のスローガンの下に再軍備反対運動が起きたが、東に対抗するためにドイツ連邦国防軍(Bundeswehr)が創設され、一般兵役義務法案も連邦議会の多数の賛成によって可決された。

冷戦を象徴する50年代の主な事件としては、本論文の冒頭で挙げた出来事のほかに①朝鮮戦争(50年6月)②英国の原爆実験成功(52年10月)、米国の水爆実験成功(同11月)③東ドイツでの民衆暴動(53年6月)④ソ連の水爆保有発表(同8月)⑤ポーランド・ボズナンでの反政府運動(56年6月)⑥ハンガリー動乱(同10月)⑦ソ連の大陸間弾道弾(ICBM)完成発表(57年8月)⑧キューバで社会主義政権誕生(59年1月)一などが挙げられる。

ヴィツシュがレマルクに *Zeit to leben und Zeit to sterben* の削除・改変を求めたのは、冷戦時代における共産主義忌避の当時の西ドイツ国内の一般的な空気に反応し、併せて東側に対抗して西ドイツが進めつつあった再軍備という国内の政治情勢を念頭に置いて「軍隊否定」というトーンを避け、西ドイツの読者に受け入れられ易い小説に仕立て、商業的に失敗のないことを狙ったものであると推測される。

理由は *Zeit to leben und Zeit to sterben* の前に出版した *Der Funke Leben* が西ドイツの読者から批判を受け（脚注の6を参照）、2万部程度売ただけで商業的には惨めな結果に終わっており、ヴィツシュは二の舞を恐れていたからだ。<sup>16)</sup>

## V

原稿の削除・改変について沈黙に終始したレマルクがKiWi社の要請をどのように受け止めていたかを知る手がかりは、彼が書き留めていた日記の中にある。<sup>17)</sup>

1954年2月10日の日記にKiWi社が原稿の内容について懸念していることを初めて記している。

ヴィツシュ、一本についてどうやらいささか不安な様子。ドイツ人たちはとりわけ不安を抱いている；（出版社も）ドイツ人たちが非常に神経質だけに。自己弁護するドイツ人たち。<sup>18)</sup>

レマルクは2日後の2月12日、サンモリッツ（スイス）に向けて出発、3月15日まで夫人のポーレット・ゴッダード<sup>19)</sup>とホテルに滞在する。ポルト・ロンコに帰ったレマルクの元にKiWi社から手紙が届く。その前にゴッダードの車を運転していて交通事故に遭っており、気分的にもすぐれない。

キーペンホイアーからT.t.l.<sup>20)</sup>における提案された変更についての連絡；国防軍を高く評価したい；1人の（明らかにそれと分かる）共産党員を社会民主党員に変更したい；最後の3つの章を外したい等々。<sup>21)</sup>

4月へと月が変わり、ポルト・ロンコにも春の気配がしてくる。だが、レマルクの気分は依然すぐれない。インフルエンザに罹り、熱が出たうえ、KiWi社の件が胸の裡から消えていない。

無礼なキーペンホイアーに腹立たしい。[・・・]電話をしてきて、他の出版社を提案してきたグレーザー。キーペンホイアーと他の出版社をとっかえるには時機を余りにも逸し過ぎている。<sup>22)</sup>

レマルクは結局はKiWi社の要請を受け入れる。しかし、進んでの受け入れではない。日記がそっけなくそれを伝えている。

沈黙のうんざり気分<sup>23)</sup>でキーペンホイアー用ドイツ語版の完成。送付。<sup>24)</sup>

## VI

レマルクが作品への干渉を黙認した理由についての確かな資料等は現在のところ見つかっていない。

理由について考えられるのは、第1に「政治への不介入」という姿勢である。

これは *Im Westen nichts Neues* を世に問うてからレマルクが一貫して堅持してきたものである。同書のプロローグ部分で「この書は訴えでもなければ、告白でもないつもりだ。ただ砲弾は逃れても、なお戦争によって破壊された、ある時代を報告する試みにすぎないだろう<sup>25)</sup>」と、小説で語られるものは戦争の非人間性を強調し、戦争反対を声高に訴えるイデオロギーを下地にしたのではなく、ある状況に置かれた人間がそこで生き抜くためにどう行動し、ときには死んでいったかというすべての人間に共通する根源的な問題を冷静な目で自分なりに追い求めようとしたことを強調している。

この姿勢がドイツでナチ党が政権を掌握し、国外に逃げたドイツの知識人たちが声明などを通してヒトラー政権への抵抗に立ち上がってもレマルクが同調しなかったことにつながっており、仲間から活動への不参加を非難されたほどである。

理由の第2は、戦後西ドイツの政治状況と国民感情への失望からくる諦観の念である。戦後の西ドイツについてレマルクにはナチズムへの清算が十分に行われていないと映っていた。そればかりか「復古主義」の傾向さえうかがえることを憂慮していた。レマルクがKiWi社の要請を受け入れたことを記した日記の同じページに『『タイム』誌4月12日号を読んだ。ドルトムントで裁判官フリッツ・アイクホッフはナチの警官20人に無罪判決を言い渡した。被告たちはある日、ワルシャワのゲッター巡回中、ユダヤ人110人を射殺した。少なくとも1人を殺害しなければ、ガスがもったいないと上司がいったからだ。裁判官と6人の陪審員たちの説明では、被告たちは命令に従って行動し、被告たちは不十分で形式的な教育を受けただけで、『悪いことを犯している<sup>26)</sup>』という自覚がなかったとのことだ<sup>27)</sup>』と記している。

政治的活動を行わないというのがレマルクの信条だったが、戦後はこれを破るような行動に出ているのは注目される。例えば映画『渚にて<sup>28)</sup>』のドイツ語版台詞作業に参加していることもその1つである。レマルクは米ソを中心とした戦後の核競争が新たな戦争に結びつくかもしれないという懸念がこのような作業も引き受けさせることになった。

さらに戦争終結直前の44年には米国政府の求めに応じて戦後のドイツに対して米国がとるべき政策について *Practical Educational Work in Germany after the War*<sup>29)</sup> (戦後のドイツにおける実務的教育作業) という題でA4版の紙に18枚にわたって提言している。ドイツを再び後戻りさせないとするレマルクなりの「政治行動」だったが、これも戦前のレマルクの姿勢からみると、思い切った行動だった。

しかし、KiWi社の要請に対して受身に終始したのは、本来の信条から抜け出ることができなかった、あるいは抜け出ることを諫める意志が働いたからであろう。



理由の第3には、その他の種々な理由とそれらの複合が挙げられる。

例えば、現実的な問題として、もし英語版が先行して発売され、ドイツ語版が出版されるまでの空白期間が長いと、英語版から各国で翻訳出版が行われても、当時の米国の著作権法では適切な法的措置を講じることができず、レマルクが多大な損害を蒙ることが避けられなかった。<sup>30)</sup> また、西ドイツの出版業界は50年代、戦争による荒廃や東西分裂という状況から完全には抜け出せず、個々の出版社の基盤も強くはなく、作家も自分の主張を必ずしも完全に押し通す状況にはなかったことである。また、レマルクはドイツではその売上部数記録では破られることのないベストセラー作家としての地位を築いていたが、ギュンター・グラス (Günther Grass)、ジークフリート・レンツ (Siegfried Lenz)、ハインリヒ・ベル (Heinrich Böll) など新たな作家群が登場してきており、その地位は確実に奪われつつあった。

*Zeit to leben und Zeit to sterben* がレマルク執筆のオリジナル原稿に沿う形で出版されたのは、レマルクが死去して19年後の1989年11月のことである。しかし、KiWi社に送られたオリジナル原稿は既になく、関係者が英語版を参考にして編集し、レマルクが書き下ろしたものと完全に一致しているわけではない。<sup>31)</sup>

### おわりに

東西冷戦構造のゆるみが明らかになってくるのは1960年代に入ってからのことである。53年3月のソ連首相スターリンの死去、3年後の56年2月のソ連共産党第20回党大会秘密会での党第1書記フルシチョフによるスターリン批判演説、これを契機としての中ソ両共産党による社会主義路線をめぐる論争によって1枚岩とみられていた東側陣営の深刻な亀裂が表面化してきた。

一方、フランス大統領ドゴールによる66年7月、同国のNATO軍事機構からの脱退や独自の核戦力保持による路線追求の結果、西側陣営の結束にもほころびが目立ってきた。これらの一連の動きは米ソ、米中関係にも硬直化から流動化への方向転換を誘い、ソ連首脳として初めてフルシチョフの米国訪問 (59年9月)、米大統領ニクソンの中国訪問 (72年2月) へと関連してくる。

このような動きは西ドイツの外交にもアデナウアー路線からの決別をもたらした。69年9月の連邦議会選挙で第2政党SPDが第3政党の自由民主党 (FDP=Freie Demokratische Partei) と組んで政権を獲得、保守系政党が下野し、東側との和解に向けた東方外交 (Ostpolitik) を始動させた。同外交によってソ連・東欧諸国との関係改善が図られ、70年代の世界的な緊張緩和 (デタント=détente) を支えていく。

ドイツが戦後、東西冷戦構造の中に閉じ込められなかったならば、ドイツの文学界にはもっと自由に作品を発表できる環境が与えられたであろうし、レマルクの作品も出版社の「自主検閲」によって削除・改変を求められることもなかったことになる。その意味で

*Zeit zu leben und Zeit zu sterben*の旧版は冷戦時代を後世に伝える証言の1つとして歴史的な価値を有していることになる。

《注》

- 1) 本論文での「文化」は学問や芸術など「主として精神的活動から生み出されたもの」の意味で使用している。
- 2) 1933年5月10日、ベルリンのオペラ広場で行われた「非ドイツ的精神に反対する運動」の一環としての焚書でレマルクの *Im Westen nichts Neues* などの著書や他の作家の著書を火中に投じる際に学生たちが叫んだ言葉の一部。
- 3) この経緯については論者の拙論「1930-1940年代のドイツ亡命作家と文化の問題」『倉敷芸術科学大学紀要 第8号』159-167頁を参照。
- 4) 英語版の *Spark of Life* (New York: Appleton-Century) は52年1月刊。
- 5) 英語版の *A Time to Love and a Time to Die* (New York: Harcourt, Brace & World) は54年4月刊。英語版では題名が“A Time to Love”(「愛する時」)となっている。
- 6) *Der Funke Leben*をめぐっては戦後西ドイツ人の「過去克服」(ナチス・ドイツが犯した罪を戦後西ドイツ人たちがどう清算するかという問題)との関連で過去を冷静に振り返る心の準備もできていなかったドイツ人読者からは「身内の悪口をいう人」(Nestbeschmutzer)の批判をレマルクは受けた。
- 7) Erich Maria Remarque-Archiv, Erich Maria Remarque-Zentrum, Universität Osnabrück (以下[RA]と略称する)所蔵の『インフォメーション』紙の記事のドイツ語訳。*Zeit zu leben und Zeit zu sterben*の削除・改変をめぐる騒動についての本論文での資料の多くはRA所蔵のものを利用。
- 8) 16. okt 54 dpa
- 9) F. C. Weiskopf. Die politischen Valenzen des Dr. Witsch oder Der kastrierte Remarque, in: *Neue Deutsche Literatur*. Heft 2/1955. S. 107
- 10) Brief an Erich Maria Remarque v. 24. März 1954
- 11) ebd.
- 12) 1863年、労働者を支持母体として創設。ナチス政権下で弾圧を受けるが、大戦後に再建され、59年のバート・ゴードスベルク綱領採択でマルクス主義から決別、国民党へ脱皮。なお、「前共産黨員」「前ドイツ社会民主黨員」は「前」ではなく、「元」とするのが正しいが、『愛する時と死する時』(上)(新潮社、1958年)の翻訳者山西英一氏の表記に従い「前」とした。
- 13) Thomas Schneider/Angelika Howind. Die Zensur von Erich Maria Remarques Roman über den zweiten Weltkrieg „Zeit zu leben und Zeit zu sterben“ 1954 in der BRD, in: *Militärische und zivile Mentalität. Ein literaturkritischer Report*. Hg. Ursula Heukenkamp (Berlin: Aufbau, 1991) S. 311
- 14) Brief an Denver Lindley jr. v. 4. Juli 1956
- 15) この経緯については論者の拙著『ドイツ 傷ついた風景』(講談社、1993年)197-198頁参照。
- 16) Thomas Schneider/Angelika Howind. Die Zensur von Erich Maria Remarques Roman über den zweiten Weltkrieg „Zeit zu leben und Zeit zu sterben“ 1954 in der BRD, a.a.O., S. 315
- 17) 日記はErich Maria Remarque Collection, Fales Library, Elmer Holmes Bobst Library, New York University (以下[RC]と略称する)所蔵のもの。
- 18) 54年2月10日付日記。
- 19) 2人が正式に結婚するのは58年2月25日。
- 20) *A Time to Love and a Time to Die* の意味。
- 21) 54年3月27日付日記。
- 22) 54年4月6日付日記。
- 23) “Disgust” という英語表記。
- 24) 54年4月11日付日記。

- 25) エーリヒ・マリア・レマルク (秦豊吉訳) 『西部戦線異状なし』 (新潮社、1960年) 4頁。
- 26) “that they committed a misdeed” という英語表記。
- 27) 54年4月11日付日記。
- 28) 原題は *On the Beach*。スタンリー・クレイマー監督による1959年製作の米国映画。時は1964年、核兵器を使用した第3次世界大戦の勃発で死の灰が地球上を覆い、人類最期の日が迫りつつあるという一種の空想的なストーリー。
- 29) RC所蔵。提言の各頁には「SECRET」のスタンプが捺されている。
- 30) Thomas F. Schneider. “Und Befehl ist Befehl. Oder nicht?” Erich Maria Remarque: *Zeit zu leben und Zeit zu sterben* (1945), in: *Von Böll bis Buchheim: Deutsche Kriegsprosa nach 1945*. Amsterdamer Beiträge zur neueren Germanistik Band 42-1997. Hg. von Hans Wagener (Amsterdam: Rodopi, 1997) S. 240 (Anm. 22)
- 31) 山西英一訳の日本語版『愛する時と死する時』では、英語版を元にしながらいドイツ語版も参照するという形で訳されており、ドイツ語版で抜けていたヒルシュマン (ヒルシュラント) の「4分の1ユダヤ人」の関係部分はそっくり生かされている一方、インメルマンについてはドイツ語版通りに「前社会民主党員」などとなっている。この経緯について山西氏は翻訳を担当した『現代世界文学全集 39 愛する時と死する時』(新潮社、1955年)の「解説」の14頁で「最後に一言、本書は最初ハーコート・プレス社刊行の英語版から訳出したが、その後作者からキーペンホイアー・ウィッチュ社刊行のドイツ語版を送って来たので、これによって時間のゆるすかぎり、全体にわたり必要な訂正をした。但し、インメルマンとヒルシュマン (英語版ではヒルシュラント) の性格描写で相違している点は、作者の了解をえて英語版に拠った。その方が面白いと思ったからである」と述べている。KiWi社の「自主検閲」について同氏には認識のなかった可能性がある。

## Cold War and its Influence on German Literature

Kunio ADACHI

*College of Science and Industrial Technology,*

*Kurashiki University of Science and the Arts,*

*2640 Nishinoura, Tsurajima-cho, Kurashiki-shi, Okayama 712-8505, Japan*

(Received September 30, 2005)

After the Second World War, the Cold War began and it caused the East and the West to confront each other seriously. The Federal Republic of Germany (West Germany) under the regime of the Prime Minister Konrad Adenauer adopted a policy of confrontation against the East.

The policy of confrontation influenced various fields in West Germany, including literature.

Erich Maria Remarque, a German novelist, returned to Europe on May 19, 1948, after nearly 9 years' exile in America and wrote a novel, *Zeit zu leben und Zeit zu sterben*. The novel deals with a young soldier, Ernst Graeber. He had fought with the German army against the Russians during the previous World War, had gone back home on furlough, but was shot to death after returning to the front.

After the German publisher, Kiepenheuer & Witsch, had carefully read the manuscript of the novel, they asked Remarque to delete and amend some parts. The points of the publisher's demands were as follows: (1) The former communist in the novel should be a former member of the German Socialist Democratic Party. (2) The reference made to the hero and his comrades as "murderers" should be amended. (3) Hitler's bodyguard's shooting by Graeber should be suggested as legitimate self-defense. (4) In the scene in which Graeber is shot by a Russian prisoner, the following sentence should be added: "After all they are partisans, thought Graeber."

Remarque could not resist the request of the publisher when he considered the severe international situation, the standpoint of West Germany confronting the East, at the front line of the West, and so on.

It was not until 1989 that the German edition of *Zeit zu leben und Zeit zu sterben* was published as the original had been intended. However, Remarque's original manuscript was no longer kept by the publisher, and therefore, the German edition had to be completed by referring to the English one which had suffered no interference in translation.